
ハロウィンな来客

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロウィンな来客

【Nコード】

N55790

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

ハロウィンな季節に、カボチャを被った子が魔理沙の店に訪れました

(前書き)

前書き

初めての人もお馴染みの人もおはこんばんわ。

澄田 康美と申します(*^|^*)

今回はハロウィン特別書き下ろしって事で、

連載で散々やっている幻想入りを、

短編でやってみました。

あんまり幻想入りって感じしませんけど、

それなりに頑張って書きましたので、

とりあえず楽しんでくださいな。

ではござ(、*)ノ

ここは幻想郷、の魔法の森。

常時おどろおどろとしたことは、

一般人などお断りもいい所である。

そこで、誰に向けてしているのかさっぱりわからない

魔法店をしている魔法使いがいる。

彼女の名は霧雨魔理沙。

人間の身でありながら魔術を嗜み、

今なお人間でありながら、

並の魔法使い以上の力を持っているのだ。

格好は黒と白が特徴的に分かれた服で、

髪と目の色は金色。

魔女丸出しの帽子と箒がトレードマークである。

そんな彼女が経営する霧雨魔法店は、

普段お客など滅多に訪れない。来ても友人ぐらいである。

先代が経営していたから受け継いだ形になっている上、

彼女自身も商売のノウハウなどわかっておらず、

更には立地条件が明らかに悪すぎる為、

誰かが商品を買いに来る事など、まずありえないのである。

なので、店は完全にただの彼女の家と化しており、

掃除をしない彼女の手によって、

常に混沌とした状態になっていた。

今日も彼女は、

その混沌の中に埋もれている何かを探していた。

「くっそ〜、どこにやったっけえ？」

普段から整理も片付けもしないのであれば、

探し物を探す出すのも一苦勞であろう。

彼女が探す作業をする事によって、

部屋は更に散らかっていく。

足の踏み場もない有様になるほど探し続けている内に、

彼女の店のドアをノックする音がしてきた。

「ん？誰だ？」

彼女は探す作業をストップさせ、

玄関の方へ向かっていった。

彼女が向かってなおノックが続いているので、

彼女はドアを開ける前に、ノックする者に声をかけた。

「今開けるから、ノックするのをやめてくれないか？」

その者に声が聞こえたのか、

ノックをする音はピタッと鳴り止んだ。

こんな時に一体誰だ？

魔理沙はそんな事を思いながら、

ドアノブに手を当て、

ドアをゆっくりと開けた。

ドアを開けた先にいたのは・・・カボチャだった。

どこをどう見てもカボチャだった。

あえて言うのなら、目と口をいい感じに切ったカボチャを、

頭に被ったと思える子供であった。

カボチャの下は黒いマントで覆い、

容姿等はまったくわからなかった。

「????」

魔理沙が目の中のカボチャを被った子供に、

困惑し、開いた口が塞がらない内に、

その子供が、魔理沙に言ってきたのだ。

「トリック・オア・トリート!!」

子供から発せられた、未熟さのある横文字。

魔理沙は顔をしかめて、

返事なのかよくわからない言葉を発した。

「はあ？」

目の前の存在が何なのかもわからないのに、

更に意味のわからない事を言われれば、

こんな事を言わざるを得なかっただろう。

それを察してくれたのか、

目の前の子供は、

もう少しわかりやすく魔理沙に言ってきた。

「お菓子をくれるか、イタズラされるか、
どっち選ぶがいい!!」

随分とえらそうな態度に、

魔理沙は思わずイラッときていた。

「こっちは探し物をしていて忙しいんだ
遊んで欲しいのなら後にしてくれ」

さっきまで探し物をしていたのは事実だったので、

魔理沙は軽くあしらうように対応した。

が、その子供はそれで引き下がろうとしなかった。

「お菓子をくれないなら、イタズラしてやるー!!」

子供は勢いよく、魔理沙に飛び掛ろうとしてきた。

が、魔理沙はその子供に対して、

いつの間にか手に持っていたスリッパで、

ハエでも叩き落すように叩いた。

「いったあ!!」

頭の所を思いつき叩いたせいか、

スパアンといい音を奏でた後で、

子供は地面に文字通り叩きつけられた。

「あんまり大人をからかつちゃ駄目だぜ」

体は幼くても、

心はもう大人だとも言いたいような台詞である。

魔理沙がその子供に注意した後で、

その子供からすすり泣く声がしてきた。

「ぐす……うう……」

魔理沙は直感で、

このままほっておいたら確実にまずい事になると判断した。

そう……叩かれた子供が高確率でしてくる行動である。

「じ、ごめんな、強くやりすぎたぜ・・・
だから泣かな『うわあああああん!!』・・・」

時既に遅し、子供の最終兵器が発動してしまった。

地面にうつぶせになった顔はもう上げているものの、

その子供はとにかく大声で泣き出した。

万人の大人は、

子供のこの行動にはどうにも頭が上がらない物である。

「ちょ、泣き止んでくれて・・・

頼むか『うわあああああん!!』・・・」

どうにかあやそうとする魔理沙だが、

ここまで泣いている子供に、

下手な言葉かけはもはや無意味である。

泣き続ける子供に、魔理沙はどうやったたら泣き止むか考えた。

その時に、魔理沙はさっきこの子供が言った事を思い出していた。

お菓子をくれるか、イタズラされるか、どっちか選ぶがいい！！

なぜこんな選択肢を迫ってきたのかは、

魔理沙にとっては謎でしかないが、

とりあえずこの子供は、

お菓子が欲しいんだなと、

魔理沙は判断した。

「お菓子あげるから、泣き止んでくれないか？」

魔理沙のその一言に、

泣き続けていた子供はピタッと泣き止んだ。

泣き止んだ後で、目にまだ涙が残っている様子で、

魔理沙に尋ねてきた。

「・・・本当？」

「ああ、嘘はつかないぜ」

魔理沙の笑顔のこもった一言に、

子供は恐らく笑顔になって、

純粹に喜んだ様子を見せてきた。

「やったあ！！本当にくれるんだね！？」

「しつこいな。あげるって言ってるだろ？」

わかつたら、家の中にながたってくれ

ちよつとお菓子とか探すからさ」

「うん！！」

魔理沙が家の中に招き入れるように、

子供は魔理沙の家の中へと入っていた。

魔理沙は混沌とした家の中で、

ひたすらに探し物を探し続けていた。

子供は魔理沙の傍で、魔理沙が探し続けている様子を、じっと見つめて待っていた。

さすがに探している時間が長いなと思った子供は、退屈そうな様子で、魔理沙に催促してきた。

「ねえ、ま〜だあ〜？」

「ちょっと待ってくれ・・・」

どこにあるかまだわからないんだぜ・・・」

明らかに困った様子を見せる魔理沙に、

子供はやれやれという様子で、

魔理沙が探している所に手を伸ばしてきた。

「おい、その手どけて・・・」

と魔理沙が言う間もなく、その子供は埋もれたところから、

一冊の本を取り出してきた。

魔理沙がその本を見た時、

わかりやすいぐらいびっくりしていたのだ。

そう、その本こそ、魔理沙がずーっと探し求めていた本であったのだ。

子供はその本をそのまま、

魔理沙に差し出すように渡してきた。

「はい、この本だね？」

手渡された魔理沙は、純粹に喜び、

少年に感謝の意を示した。

「そうだぜ・・・ずっと探してたのは、この本だぜ！！
ありがとな坊主！！お陰で助かったぜ！！」

魔理沙がその子供の頭に手を当て、

笑顔を向けて撫でた。

撫でられた子供は、

少し照れた様子で、

先ほどの約束の催促をしてきた。

「それはいいんだけど・・・
お菓子はどこにあるの？」

「ああ、お菓子か
それならこっちにあるぜ」

魔理沙が台所に向かっていった後、

少しもしない内に、袋に入ったクッキーを持ってきた。

「ほら、これでいいか？」

魔理沙がその袋を子供に手渡すと、

子供はさつき魔理沙が見せた以上の喜びを見せてきた。

「やったあ！！お菓子だあ！！ありがとう、お姉さん！！」

子供が素直に喜ぶ姿は、

どんな形であっても

見ている微笑ましいものである。

「お、おう・・・」

その様子に気圧され気味の魔理沙に、

その子供は少し疑問に思ったものの、

あまり気にせず、受け取ったお菓子をポケットに入れた。

その後に、魔理沙はその子供に・・・聞くべき事を聞いた。

「今更なんだけど・・・坊主は、一体誰なんだ？」

「僕？僕はハロウィンでお菓子を貰いにきた子供だよ」

ハロウィンという単語が、

魔理沙には聞き慣れない単語であったのか、

明らかに疑問だらけの表情になった。

「ハロウィン？ハロウィンって何だ？」

「え？お姉さん、ハロウィンを知らないの？
ハロウィンっていうのは、僕みたいな子供が
お化けの格好をして、お菓子を貰いに行く祭りだよ」

ああ、なるほど、そういう事だったのか。

魔理沙はその子供の説明によって、

この子供がしている服装と目的の両方に、

納得がいったのだ。

最初の意味不明な行動も、

そういう意味だったんだ。

魔理沙は「なーんだ」という表情になって、

とりあえず落ち着いた様子になった。

目的を果たした子供に、

魔理沙は一応の確認を取ってきた。

「で、坊主はこれからどうするんだ？」

「そうだね、次の家を探しに行くよ」

「次の家を探すって・・・
この近くにあるのはアリスの家ぐらいだぜ？」

魔理沙の心配をよそに、

子供は含み笑いをさせた後で、

玄関に行き、

ドアを開けた後で、

魔理沙に最後、こう言い残したのだ。

「ありがとう、お姉さん

来年、また来ると思うから」

魔理沙が「待て」と言う間もなく、

その子供はドアを開けて、そっとドアを閉めてしまった。

魔理沙が急ぎ足でドアを開けても、

その子供はどこにも見当たらなかった。

まるでその姿を消してしまったようである。

「あの坊主……一体何だったんだ？」

思い返せば、とても不思議な子供である。

こんな危険な魔法の森にあるこの店に、

お菓子を貰う為だけに訪れた事。

魔理沙が探していた物を一発で見抜いた上に取り出した事。

それが全て、根拠のない事であったのが、

魔理沙を余計謎にさせていた。

狐につつまれた気分になった魔理沙は、

その子供を探し出そうとは思わず、

変に疲れた気分になった為、

そのままベッドに直行し、

眠りに落ちていった。

翌朝、魔理沙が目を覚まし、

混沌としていたはずの居間に行くと、

今は見違えるほど綺麗になっていたのだ。

掃除をする過程で出てきたと思われる本などは、

机の上等に積み上げられており、

完全に整理されていたのだ。

訳のわからない魔理沙は、

誰がこんな事をしたんだろうと考え、

しばらく歩き回っている内に、

床に一つ、白紙の紙が落ちていたのだ。

その紙を拾い上げ、裏を見ると、

誰かが書いたと思える字が書いてあったのだ。

そこに書かれていたのはこつである。

欲張ってイタズラもしちゃいました
もう少し部屋は片付けた方がいいよ、お姉さん
by ハロウインのトリック

魔理沙はその手紙を読んだ後、

ただ苦笑いを浮かべるしかなかった。

たく、味なイタズラしてくれるぜ

(後書き)

後書き

どうでしたか？ハロウィン風東方短編は？

今回出てきた子供に関しての情報が少ないでしょうけど、

この子は読者の想像に任せようと判断したので、

こういう形になりましただ。

なんだか途中放棄臭が漂うな〜・・・(´・`・´)

それでも本当、努力はしていたつもりですので、

まあ勘弁してくださいなm(_____)m

スペシャルサンクス

霧雨 魔理沙 様

カボチャ被った子供

きっかけをくれた黒神猫 様

では、このような粗末な駄文をお読みいただき、

真にありがとうございました(*^|^*)

by 澄田 康美

PS ひっさびさの短編は・・・ちょっとしんどかった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5579o/>

ハロウィンな来客

2010年10月28日20時13分発行